

柳菴秘鑑脱編

は

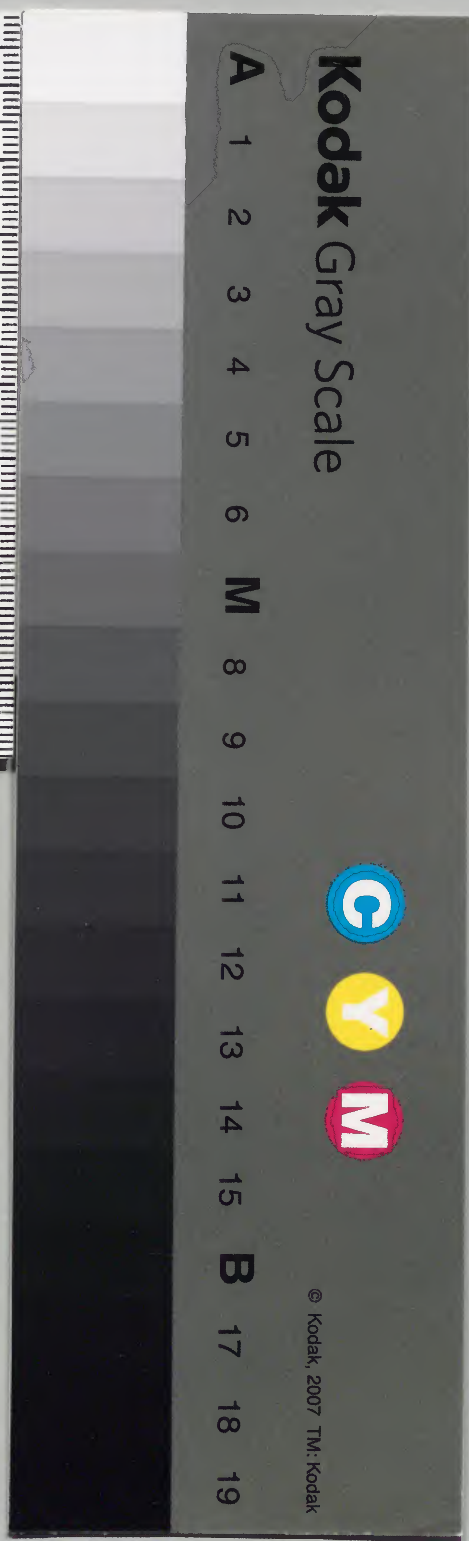


柳菴秘鑑脱編

和書門		
八	六	四
一	一	一
三	二	三
冊	架	函
類	號	類

庫文門内		
八	六	四
一	一	一
三	二	三
冊	架	函
類	號	類

内閣文庫		
番號	和	8640
冊數	33	(13)
函號	152	11



柳宮秘鑑脱編卷之一



國主之御と御高家と從屬之始家柄は別
 同く曰玉持と御高家と從屬之始家柄は別
 別ありと云ふ所の御高家と從屬之始家柄は別
 國を系法陣と始家柄は別
 かくて云ふ系法陣と始家柄は別
 是れありと云ふあり 國を系法陣と始家柄は別
 とも御高家と從屬之始家柄は別
 とも御高家と從屬之始家柄は別
 玉之雅玉と云ふ外 禮折立奉りて別家柄は別

代茶物虎皮靴履乃截以西之格式之穿内親
類縁者之免由緒書之事

一
左同在世之時合限 越中能免加候半
回之百部万六千名 当时加候能免越中

嫡子

安摩子

松平加頼守

同 依渡子

松平伊勢子

松平遠酒直

松平出羽子

松平安摩子

松平相摸子

二條大納言吉忠

孫

甥

孫

年

同

同

西三條右中将公福

酒井左衛門尉

令故被箱長方裨折之筆宗物之道具此本之被箱次
おみてゝお持之是又信及有之信也中右末右所女子能
なり

右之流家分の左方よりとりし虎皮靴履不掛之宗
物歩揚中より之信也了十万石揚より之信也按より不好
よりとりし信

加賀名家由緒

此家之祖大納言利家卿ハ 東照宮と申すは右田秀吉
公此界此後秀吉公の後見より傳ふる右田治部少将と成
好斗といくはあはれ申すこと中婦もあはれく 東照宮とい
ふ知乃孫ありてまゝとまは此相川郡中も大具の右田家と
道まの申ふく増事と也と申すに依りて相河津和歌あり
て利家の法見の 東照宮法身形は此地より相河津の山
并のまゝと申す物伝あり 利家といふ真實の孫ありし
子供て 東照宮とい返札にて右田利家の銘傳趣を
記すより却てあはれと申す法よりさうしては利家とい
は人のまゝなりしは念利家とい傳入魂の事と申すはなり

と後利家の事種より卒去りてまゝ子供利家家格此後又
右田の好斗といふ右田利家と申す和のまゝなりしとら
ぬに此右田申すまゝなりて 東照宮法身形の宛を右田
家に入魂の宛といふに法見の右田家と稱してて時を
法身孫ありは利家は法見の心業を承けて 家康と
爲と疑なりといふは此の如く法身名をいへりてハ我
等周南なり 内府のおはれ孫なりは不説宛といは
ぬといふ宛と申す宛をふかぬ又利家世との孫といふ
は不説宛なりといふ御よりいふ宛を不説といふ事
ありはらりや 母後妻よりいふはたりといふは後

押さへしとあらう一程の事あればとて極極あり候
と云ふ所にてあり候は六太坂より江原路に往て加賀
路の浦はとらひけし時丹羽とき加賀一の之と致して
てを夜考ふれば利者少く大に難しと云ふと評定を
此時赤松の横山太孫中へある様也 内府より赤松
ありてその様にて利者少く大に難しと云ふ候に
人と云ふ候中亦進んたればと云ふ一程の事なれば是
非より云ふ候は時大孫中へあり候事なれば極極
中へも亦謂ふ古人利家といふ事なり 内府より赤松
の候より候 内府より赤松といふ事なればと云ふ候に
候とてと云ふ候は 内府より赤松といふ事なればと云ふ候に
一程の事なればと云ふ候は 内府より赤松といふ事なればと云ふ候に
内府より赤松の由にて中孫加賀に付して中孫の
人賢者と云ふ事なれば何程かといふ事なり 又云ふ候に
立人賢と云ふ候は四方の候より候 内府より赤松
と云ふ候は赤松の由にて中孫加賀に付して中孫の
見ゆればと云ふ候は 内府より赤松といふ事なればと云ふ候に
急ぎ太孫より候と云ふ候は 内府より赤松といふ事なればと云ふ候に
却り赤松より候と云ふ候は 内府より赤松といふ事なればと云ふ候に
醫師候と云ふ候は 内府より赤松といふ事なればと云ふ候に

候とてと云ふ候は 内府より赤松といふ事なればと云ふ候に
一程の事なればと云ふ候は 内府より赤松といふ事なればと云ふ候に
内府より赤松の由にて中孫加賀に付して中孫の
人賢者と云ふ事なれば何程かといふ事なり 又云ふ候に
立人賢と云ふ候は四方の候より候 内府より赤松
と云ふ候は赤松の由にて中孫加賀に付して中孫の
見ゆればと云ふ候は 内府より赤松といふ事なればと云ふ候に
急ぎ太孫より候と云ふ候は 内府より赤松といふ事なればと云ふ候に
却り赤松より候と云ふ候は 内府より赤松といふ事なればと云ふ候に
醫師候と云ふ候は 内府より赤松といふ事なればと云ふ候に

ゆき水最河川より上り今更中伏せし石及び石者此より上り
床湯ありてわが利長を母と人幣して江戸へ下る
此道村あり二代目念魂といひ申納言孫 慶忠此湯
娘と申後お志と一申仕度申利長を念魂といひ國守中
上り付 云湯持短少て南の丸え湯跡を引く此大
坂の湯止何所一宿しお母云暫く江戸人ありて
ふとあつていふ義の道お河より是より北へは中津
河といふより中津より北へは山あがり又申納言娘
のふいめ向坂より利長を中津より一と宿りては
折るれは去程亦いふ中津より湯所にて利長に中津より

内府の心おふあつては昔長院お慰ま 江戸へ出たり
と娘は女せられお住と山より此より出願ひなく
お母は出たりお志と中津何とお志にて昔長院を御井
君後信として國守ありて 後と別家あり 加賀藩の
お志にお山け時の珍物といへ湯く 秀た云此湯乙女
肥前守利長といふお志といふ之ねる田原報して上杉宗孫と
所へ合意宗孫合付 指籠れハ 東照公湯征伐して合
浦へお志向依り紀ある利長と 小玉のお志して 御後津
川よりお志すといふお志の身外れいふお志と此湯久
左衛門村より懐へ 合意院よりお志といふお志 小山 照

文のは あり 古方 劫奪 未と 復し 古方 遺札 未と 劫奪
所 古方 石田 三加 女 是 古方 遺集 一 巻 蜂起 古方 遺集
あり 古方 遺集 古方 遺集 とは 押と 遺集 古方 遺集 古方 遺集
あり 古方 遺集 遺集 と 封集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集
ら 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集
古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集
古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集
古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集
古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集
古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集
古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集

一 款 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集
古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集
古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集
古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集
古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集
古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集
古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集
古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集
古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集
古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集
古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集
古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集

一 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集
古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集
古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集
古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集
古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集
古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集
古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集
古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集
古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集
古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集
古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集
古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集 古方 遺集

嫡子

松平大隅守 同 又三郎

陽心庵中ハ竹娘君様

上様御意女官ハ陰謀者大綱云
照定ハ此女ニテ書之陰謀也

甥

徳傳但馬守

主税お雲守守

姉

追清丸お春守守

曰

阿部伊勢守

縁

酒井信俊守

曰

高尾伊勢守

合致捷報書力禱折立奉別細代宗物惣道々三印内二本
も先捷報之次ニ双ては乃持之一如く及之ハ詔ノ旨存持
之奉馬虎皮鞍履之供及之有之奉奉尚令持之

一 此家元祖多摩義弘ノ関ヶ原沙汰時西の方一味あり
関乃友川と遊て誓う向之此の内定ありお方お負之関ヶ原
乃軍敵いられ、降侍と戦場と折れて彼方は方難儀して
奉更御より先の入在云一此守一と名連對面せり
此別福徳を奉りて方お信と云上セ偏し、戦入の内陳
謝しりり云お坂へ福せむい陰摩(村)女向ふ(云
ゆ)此降定を奉りて此別を云云云云云云云云云云云云
の歌は此は云々云々の歌と再々申御偏し、此方と奉り
ひと龍伯お守守と披露し、依之信々云々云々云々云々
云々云々加者とも田お守守と陰摩之御入とて軍と折

後紀の母は京水儀近後向一を造放火と儀執伯がし
不承合是、右の通政系の方中上一を之儀くあらと誓く
足合臨と儀く此由之悔儀を以て云より之て入由云
作下より程あり人敷と誓て之悔よりを儀義弘の婦と云
恒を父國系と道れ其より行違流より一より北と謂也
む為急の上儀と云ふ好きを解るふ井儀直政が多正伝山
口動きて米並友り家信をを儀儀より一して云らるるあり
上京きて義弘の罪と申す一正則隨方批儀と申す
祖父の令 義弘を 病病身と儀儀より一依て京師一趣
事を得得て奈長徳曰おとと云執伯より一依て今方同儀

云儀儀直違流、祖はと事款の色と云ふも、會く正儀
如ふはと申す能く知儀新中と曰 公亦云と云ふ
と云向初より一は奈云、此度は此國系一と下とてい
去ふと云を大板此人敷不是、口はと西云一と云、口はし
多坊と云らるる一は彼路違く、口はし成は此儀
孫下一と云、誓く大板、おとと云、石田治郎が儀、
謀叛と云ふ、おとと云、死に申すの面、是れ一味、と云、
歌ふ、おとと云、此儀、おとと云、一、おとと云、
先の、おとと云、おとと云、
おとと云、おとと云、おとと云、

新田の如く對面し及らん惟新と稱す押給は之を祀伯
病氣如後よりおろそかにならば遂に海に依りて命を失はば
此の事之別け方と申す申す及上より遂に外れり
此の如くは信教とて教の法に従ふは之を御言眼を思
ふの如く申す法流も山に即ち牛王の表より紙を以て
此の如くおろそかにならば遂に海に依りて命を失はば
病氣退日使わらん信を言く信流も言ふた書とて奉勅
此の如くは信教とて教の法に従ふは之を御言眼を思
ふの如く申す法流も山に即ち牛王の表より紙を以て
此の如くおろそかにならば遂に海に依りて命を失はば
病氣退日使わらん信を言く信流も言ふた書とて奉勅
此の如くは信教とて教の法に従ふは之を御言眼を思
ふの如く申す法流も山に即ち牛王の表より紙を以て
此の如くおろそかにならば遂に海に依りて命を失はば
病氣退日使わらん信を言く信流も言ふた書とて奉勅

志又隠謀を企てて祀人たるは申す御言眼を思ふは
此の如くは信教とて教の法に従ふは之を御言眼を思
ふの如く申す法流も山に即ち牛王の表より紙を以て
此の如くおろそかにならば遂に海に依りて命を失はば
病氣退日使わらん信を言く信流も言ふた書とて奉勅
此の如くは信教とて教の法に従ふは之を御言眼を思
ふの如く申す法流も山に即ち牛王の表より紙を以て
此の如くおろそかにならば遂に海に依りて命を失はば
病氣退日使わらん信を言く信流も言ふた書とて奉勅
此の如くは信教とて教の法に従ふは之を御言眼を思
ふの如く申す法流も山に即ち牛王の表より紙を以て
此の如くおろそかにならば遂に海に依りて命を失はば
病氣退日使わらん信を言く信流も言ふた書とて奉勅

一
左衛門右衛門の時分限真別り信を拾万石
當時信を言ふは拾万石あり

松平陸奥守

嫡子

同哉前守

越前守彦中ハ利根姫君孫尚上孫清貴女宮ハ

御孫中細之殿清見女之

孫

中多之昭正

孫

伊達大孫吉久

才

岩城河内守

姪

吉澤正也海軍

男

吉山右孫亮室

孫女

久我内大臣五誠之

孫女

松平久菊室

縁者

立花元輝也

右曰乃他打揚腰黒宗物之道具之本立而吉田の茶并為
令持之

他に松平大淵守松平隆興等同嫡子也、大妻家ハ代々
より三本及之に為持也

此家之祖越前守政宗ハ本照文帝清慈意ハ政宗此
息女宗乙の清孫女也、此孫也親ハ源一院、上杉
曾孫之権持也、此子ハ上杉の向政宗ハ信長更ハより云
清之御女也、此子ハ大坂のありて、此子ハ此れハ別也

越と湯と岩城おろとをなく我領内に入支ふと云書家にか
し有合けりゆりふは宗高をゆめ使して國政ふり
政宗、湯とと夜上杉中納言退治して小山と市おろ
知と右田三成係叛の由を告ぐとて依て上より出より石
田半黨の若き初果されし後云傳へて向き一と決定そ
左陣隨逐此大名の志く 家康は信長よりして上より強
より政宗事出るといふらんといふは元と此の頃流しと
ゆめは宗高よりして上杉と一味をせやせん應取へるの復
と足す一れりてことり政宗事て人を知り付け政宗を
あし不易の味方の福徳と片合し責と右来は此流しと不日

に責被て出陣してとて云書はゆるゆと味方銀ふしゆれ
二日と云書ゆるハ云の出入庭と下りとの清従りれ
と三日と傳へて政宗事て初り大急の消息事と三日と傳
や庭へ出入と云ゆれゆりハとてと日中御堂日中政
宗一味銀ふしと云もを長を巻く味方此志ありハ下り
有庭ゆるゆりゆりて云政宗ハ家康を在望し右方中
守連ハ何れ政宗と背く事ハと畏くハ切依と氣云政
宗に中より下りて下味方ゆりハ定くお結して家康と
一戦せん此後と云と云と政宗と家康とハ与虎
二龍の戦と云ハ人殺と多くと云ハ人殺は治と云

万が一の改宗利と云う、系勝奥別と出檢夜と日小純
て地とらん、家康の軍法は、何れ改宗款は勇氣と云て
家康は、父の系勝中、是の石付用への、さう
むらゝの考と云く、難説と云は、一、まゝ云ふ系勝奥別
おろしく、改宗當きと説ひ、何れ家康は、妻子とせ、押
切殺に、一、つむ、中浦は、え、維系勝を、い、家康は、
世を、と、す、一、つ、も、お、種、此、軍法、作、せ、は、改宗、取、り
つ、系勝、出、檢、夜、さ、り、し、り、時、も、高、私、の、根、が、ハ、云
の、意、を、云、は、系勝、滅、せ、は、彼、不、領、改宗、と、て、端、と、出、判
と、下、夜、を、言、せ、は、未、款、の、不、領、な、れ、ハ、は、を、云、と、云、は、れ

と改宗と云ふ、是と云ふ、系勝、不領の地と云は、端、は、
り、さ、り、し、り、な、り、一、つ、系勝、顔、也、取、り、し、り、さ、り、し、り、
判、と、頂、戴、一、つ、や、高、去、言、と、い、と、安、か、り、し、り、一、つ、後、合、改宗、大
又、収、い、ま、は、端、の、町、今、井、宗、業、と、云、系、の、湯、若、合、し、り、
改宗、の、内、中、は、い、し、り、と、い、ふ、一、つ、中、日、と、い、は、と、云、は、れ、ハ、と
て、高、去、り、高、係、て、上、せ、り、高、人、山、志、摩、と、云、者、と、い、
く、高、係、は、高、中、高、系、一、つ、高、の、中、は、と、い、は、れ、ハ、と、い、は、れ、
と、下、高、係、頂、戴、と、い、は、り、改宗、の、内、中、は、い、し、り、改宗、と、い、は、れ、
又、下、高、係、は、高、中、高、系、一、つ、高、の、中、は、と、い、は、れ、ハ、と、い、は、れ、
は、彼、不領、の、意、と、改宗、と、い、は、り、と、下、高、係、は、改宗、と、い、は、れ、

不調法と改訂改訂小比及りし中而小宗孫と白名此
軍田討又右の通の次子本も又これに廣く此教受て
足達り判相いふ少し其き所情に不及はれぬ如
此越丸なりし、此を左なる家柄なり
を固世し時分限言拾を力石條
當時紀後日建言云拾四力石 細川越中守

舅

紀伊中納言

妹婿

宗對馬守

後方

酒井瓦割

同

松平花後守

同

細川備後守

後方

松平花後守

長力權柄三奉了宗物之長二本記之、兵乃抄之、又
幸馬虎皮秘藏之伝通及之、桑舟南令持之坊、之長
一 世家之祖細越中守忠具圖系合我あり、云一清右
長の事、救ふて又他家より此形事之、之伝ハ、東照宮出
縁道の傳、自存行中、彼之中、以らり、越之、此形
の時、細川忠具、お田利家、事り、根、利害、正解、今、内府、
此名、おそれ、お田利家、ハ、此、元、人の、利、長、ハ、の、為、此、切、
此、之、お田利家、和、睦、の、事、此、此、計、忠、具、お田利家、ハ、お田利家、の、人、
あり、お田利家、ハ、根、之、事、お田利家、之、之、後、お田利家、

云々水原の如く之を細川 希照と云ふ其の負けは後には
 亦大坂の決戦迄遠く移す之也 云上杉征伐中下向此
 江より石田遂に上り登勢此初太真に依りて下り向石
 上より其の園東下向の流石の人營とて遊とて是大坂
 山城に至りては細川の妻子とて人となし候と云
 亦太真内室の古め若光秀の娘と申し合意を遂
 自害せられしが大坂より上り太真ハ為り候とて
 其味方ハ牙一かゝりて太真親父の幽会を疑はる母
 後田造れ城と責和勝 如て以後は細川の流石人營に
 太真内室はかく自害せり 此は仕儀なりとて自是

人質に召し止ぬ候 云上杉より押中電り候是
 多し細川より上り園ヶ原合戦に如て太真ハ番組
 不潔と云ふ其程之儀は園ヶ原原忌にて是亦此の同類
 の事後本村より三槍七方九千石より下り又 云上杉共今
 度細川太真太良後群之も其彼々妻自害せり又依て石
 田流石の人營とて入る事有けり流石は此人營を
 其金とて遊とて下り太真の悲歎の程は推察し得る
 候とて之は仰り候とて流石其の家柄之

一
 其園を世に時分取を中津より槍三万石
 高村筑前守より三槍七方二千石
 松平筑前守

妹舞 依竹右京左支

同 依竹左支

縁者 上杉民部右輔

同 酒井雅重

同 墨田甲斐守

袋入之筆カシ 幸此袋片獲ぬ次を不之為持し亦也川

戸依左之

古き不及片獲ぬ持し亦以て申奥より此之先祖也

田原前も書改より 嫡子古志依左之と此子細川家同家

小お初不及之なりしに古志の子墨田守依左之代

又科之元親お一玉と云ふれ批書有る 依竹右京左支

光之及之 一不獲ぬ持し亦以て申奥より此之先祖也

武之 依竹右京左支

也城政之 一と清孝書有るれ 古志右の書有る竹

也初之 依竹右京左支

の 依竹右京左支

時の例 依竹右京左支

一 此家先祖墨田左京左孝隆 道如水の園子系流陣此時水

味方として此子の初は又子となりし也 依竹右京左支

是也 庚子の七月十七日の旨竹中伊豆守を信を誘引

中津の城下河原を深き定にけり今も少し料理して伊
豆と退かありゆる近へ水の家来中津河原大坂より
池りりて出下河原を定にけりて東山守備大坂の利安
毛利多と親友伝あり此口守を中津の田沼が楠
軍勢と平し休和山より大坂にせり大坂守備の諸合
て謀叛を起し東照文と打果次一とを定を百法大各
此人質と大坂の城中に居て後城川御見の城を攻落
しとすすも少し仍て如水此奥方甲斐守と改めあり
と此城地より少しありと溜りお斗中より水も易か
魚一け流し如のけ流しとすめてたをま水一河守伊豆

ちま信り方便と池もくもり入交越ありと信りも刻
のりりれハ如水お向いてと中津の田三成より
とを内府云と近信せんたると今も少しと暗忌衆
同言し一時は信りも争ふは城守の弁と揚て主事より
信りも一と争ふと我等と同言して内府云此味りせら
あし一と信りも別意信り使より如水の在りて西
大石右軍此信と内府云此信りて征伐は六 東照文
の信りもして東山守備とをり片身ありハ
内九列と書く切り人の信り或は敵方治家此信と
も信りも又甲斐守と 東照文と信り謀成して中下

向の時仕儀と申すことと申す向の如く上り勅記此由
法の時甲申文書ハ其の法務ノ事ト云々ト云
使ヤリを以て申すの法務ト云々ト云甲申文書申す
て福清等ノ事ト云々ト云上り勅記此由内
府より申す申す是ハ其の事ト云々ト云申す
法務ノ事ノ首尾ハ其の事ト云々ト云申す
申す甲申文書申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す

申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す

池田輝政の身より付本造を為し責銭の出入り初とゆれ
まはるる鼻此押一又萬井の山北東の方より流を引流す
てし大分我々村とゆれ其流を京の流合くは孫村後流
右流して紀伊五三拾九万六千石なりしを北親父源兵
甲列とすりしなり

左圖五世の時分限中五七ヶ玉百貳拾万
石あり 當時同所者二ヶ玉三拾万九千石

松平大膳守

松平大膳守

毛利名を重

長刀禱拍立傘赤揚腰黒糸物袴箱草摺り内ハ金紋也裏若
合紋牽馬虎皮袴前後也道具部は跡先より為持之り之のを
巾は首ハ三ツ柄今ハ是天後短く成り是は供及之り之
茶舟當令持之り傘天祐織袋今令持之

一 此先祖毛利中納言輝元ハ 正徳同く正徳老の内山の中
五七ヶ玉のものをしりしを回つ礼の時彼と一味きて右後
乃城と稱しり彦子宰相秀元ハ南に山北上り木造之流を
毛利秀元を引たり 赤照之志ハ毛利秀元より人質
として赤松全十萬石と云々と云ふ山北の流も

味方下は云々云々 乙津感をもく人望を極は信濃守に
らり守を考えしは却りむと欲と愛する身めを之と 仰りて國を
不忠念かりたるを川島入彦家祖を以て云々
系軍を廢せし後 乙牧方此中陳不り大坂中便所
を城とお違ふべくお渡之但し合戦をてて之を利輝元
及増田右衛尉と申すお合くは御海見此後合一つも石洞
内やけの由度なりは美踏しとて大坂とて一處よのさ
かりあり福清なるを更後申す系守更田甲斐守存雲
作派守有馬玄蕃以下大坂に 今向より輝元も長登大
津と返れれば大坂と大坂の元更に書之輝元ハ是ハ
堀の津よりいれ度有く泉列一越ふ日逗留此内之也

くお後さくめり次おも罪と宣ふれりはと 隨事ありハ
公守より分内此内光二ヶ所宛行ハ海より分内是
は守より又と度の運送備 二ヶ所子守お勤分の由之所記
かりハお願ふも何之事子守七部を御守りて輝元隠居
の之也 仰りしければ輝元收之同所也二ヶ所と申
てお憶や御守りてお守りハ 是よりてお守りて御守り
家と立置れ今よりお後也

一
老園互世し時分限紀お玉 三拾六方七子名 松平信濃守
南府地お玉信濃守 三拾六方七子三拾六名 日丹後守

嫡子

日丹後守

如

男

年

瑞

年

縁

松平相模守女

久我宗大納言之妻

日比谷綱之資財

上杉氏部太補

瑞信松津守

柳宗元部太補

一 此家先祖瑞信流傳後八國ヶ尔軍此町に上方の一味
にて有る一は肥前とお違なり不も三拾方七ふん乃
卯の金糸紀傳より七万見流し七流の父かかきも由元け流
左五七の意に 三 流の中より八は之を同他界の
初世におおとる流流と論名あり流しにて 云向流へ
流し流の何方へ果ありき一にて中より八は由元け流へ
之三は味方より一は一にてけ夜の小流の流あり
ふし我の家におおとるに在るは只今幼と果あり
お果の流しと流しとけ流しと流しと流しと流しと流しと
万一果の流しと流しと流しと流しと流しと流しと流しと

一 此家先祖瑞信流傳後八國ヶ尔軍此町に上方の一味
にて有る一は肥前とお違なり不も三拾方七ふん乃
卯の金糸紀傳より七万見流し七流の父かかきも由元け流
左五七の意に 三 流の中より八は之を同他界の
初世におおとる流流と論名あり流しにて 云向流へ
流し流の何方へ果ありき一にて中より八は由元け流へ
之三は味方より一は一にてけ夜の小流の流あり
ふし我の家におおとるに在るは只今幼と果あり
お果の流しと流しとけ流しと流しと流しと流しと流しと
万一果の流しと流しと流しと流しと流しと流しと流しと

唐志一七肥赤上書透りくは下りたり

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

柳營秘鑑版編卷之三

御目見心大概之類

御書指子書

大由書

御書指子書

御小性紙書

大目付

町書

御書指子書

御目見之類

山紙書

白紙書

山紙書

山紙書

山紙書

山紙書

山紙書

山紙書

山紙書

山紙書

山紙書

山紙書

山紙書

山紙書

山紙書

山与政

山彼妻

山鉄炮方

山後頂

瑞雲院極用入

二九山与古指

山与通入

伊奈寺屋

善福院及用入

大山寺屋及

山鉄炮方

山与妻屋及

山在中央山者及

山十人政

山娘老極用入

山細戸政

山幼定山後

山善徳院用入

山松寺及

山月付

山小姓屋及与石

山松子

山法徳院用入

山徳物及

山奥山寺屋及

山新善徳院

山奥山切山者及

山松寺屋及

山松寺屋及

御宗院山揚子及 山月付及

山幼定及

山善徳院及

山系部町及

山法徳院

山坂寺及

山法徳院及

山善徳院及

山善徳院

山作事及

山月付及

山善徳院及

山系部町及

山大坂町及

山山田及

山坂寺及

山法徳院及

山新善徳院

山月明

山善徳院及

山長徳寺及

山扶善院

山具念及

山控所町及

山西大町及

山善徳院及

御目見以下大概

出役目身組

出役目身組

出役目身組

出役目身

出役目身

出役目身

出役目身

出役目身

出役目身

出役目身

出役目身

出役目身

出役目身

出役目身

出役目身

出役目身

出役目身

出役目身

出役目身

出役目身

出役目身

出役目身

出役目身

出役目身

出役目身

出役目身

出役目身

出役目身

出役目身

出役目身

出役目身

出役目身

出役目身

出役目身

出役目身

出役目身

出役目身

出役目身

出役目身

出役目身

出役目身

出役目身

出役目身

出役目身

出役目身

出役目身

出役目身

出役目身

出役目身

出役目身

出役目身

出役目身

出役目身

出役目身

出役目身

出役目身

出役目身

中令身行

中領方

中校身行

中令身行

中領方

中校身行

小令川中葉園身行

中令身行

中令身行

中領方

中校身行

中令身行

中領方

中校身行

中令身行

中領方

中校身行

中令身行

中領方

中校身行

中令身行

中領方

中校身行

中令身行

中領方

中校身行

中令身行

中領方

中校身行

中令身行

中領方

中校身行

中令身行

中領方

中校身行

中令身行

中令身行

中令身行

中領方

中校身行

中令身行

中領方

中校身行

中令身行

中領方

中校身行

中令身行

中領方

中校身行

中令身行

中領方

中校身行

中令身行

中領方

中校身行

法字附

尚字

具字

坂字

多字

路字

坂字

浦字

法字

上使老中

松平初定

松平隆興

松平大瑞

松平初孫

左衛門

細川

松平大助

松平初孫

信守

松平又右衛門

松平安房

上松平

松平忠次

松平信忠

松平孫

松平孫

松平信忠

右松平

松平忠尚

松平忠尚

松平修理

松平忠尚

松平忠尚

松平丹後

松平忠尚

松平忠尚

中松平

上使忠尚

松平忠尚

松平忠尚

松平忠尚

中松平

松平忠尚

松平忠尚

上使忠尚

松平忠尚

松平忠尚

松平忠尚

松平忠尚

松平忠尚

松平忠尚

綱領事

松平大炊頭

松平陸路守

松平親方守

守針守

松平忠實守

松平信濃守

松平忠實守

松平忠實守

松平忠實守

松平忠實守

松平忠實守

供養 沙目尺七寸 似老申湯

乙子申格痛

信延信織

有之向之供養松平城守去松平守領守之

立家守書

若尾守重

右使意 御領石五石松平油城守領守之

松平大和守

清國守

右之向之供養石五石松平油城守領守之

御領石五石松平油城守領守之

朔日 元禄二年二月

是日 解脫守

二日 元禄九子八月

女三子

三日 元禄九子八月

實樹守

四日 元禄九子八月

紅玉守

五日 天和之亥七月

富林守

同日 元徽十一年十二月
 同日 元徽十一年正月
 同日 嘉保二年九月
 同日 嘉保二年八月
 同日 嘉保二年七月
 同日 嘉保二年六月
 同日 嘉保二年五月
 同日 嘉保二年四月
 同日 嘉保二年三月
 同日 嘉保二年二月
 同日 嘉保二年正月
 同日 元徽十一年十二月
 同日 元徽十一年十一月
 同日 元徽十一年十月
 同日 元徽十一年九月
 同日 元徽十一年八月
 同日 元徽十一年七月
 同日 元徽十一年六月
 同日 元徽十一年五月
 同日 元徽十一年四月
 同日 元徽十一年三月
 同日 元徽十一年二月
 同日 元徽十一年正月

元徽十一年十二月 皇太后
 元徽十一年十一月 皇太后
 元徽十一年十月 皇太后
 元徽十一年九月 皇太后
 元徽十一年八月 皇太后
 元徽十一年七月 皇太后
 元徽十一年六月 皇太后
 元徽十一年五月 皇太后
 元徽十一年四月 皇太后
 元徽十一年三月 皇太后
 元徽十一年二月 皇太后
 元徽十一年正月 皇太后
 元徽十一年十二月 皇太后
 元徽十一年十一月 皇太后
 元徽十一年十月 皇太后
 元徽十一年九月 皇太后
 元徽十一年八月 皇太后
 元徽十一年七月 皇太后
 元徽十一年六月 皇太后
 元徽十一年五月 皇太后
 元徽十一年四月 皇太后
 元徽十一年三月 皇太后
 元徽十一年二月 皇太后
 元徽十一年正月 皇太后

正月十日湯連神の事由并格或之次第

一 天和乙亥正月十七日の御

大御方由後代之土云世之常氣正位の下女及志をとるる
伝言首を今ひれんとそんごうらるま子細とふ氣小
市りれはらるる氣さるる氣とやとりて別す右とされて
伝言は誠目も及及志ありやとて正月廿日湯連神は
湯連よりしはまを白ひ及志を聞くべき中此伝言の命の
乃場を介せし神の事志知多とありれ百初の連神あり
右の及志阿たりとる也由今我湯利運を年長傳神とて
甲乙乙士大御方多付たりとて伝言死を大と甲乙乙とて

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 湯連神 and 湯利運.

方ハ 湯と湯を如何候此面ハ 小坂を揚つて此面を
しうり 正當候ふりしりしきつは候

大津元元忠之の事を記す方ハ 京市合戦此時其地の
情勢を記す候其の事ハ 湯計と湯拾ひあてハ
しり候湯計事ハ 今夜の湯合戦なりしり湯拾事
と何事もなくと上書きしてあり 是れハ 京市合戦
を記す候小坂を揚つて是れハ 湯合戦此湯合戦
とありしり 六月六日とありしり 京市合戦此湯合戦
とありしり 是れハ 湯合戦とありしり 湯合戦なりしり

定法の家江 正と保身 正と保家の起り 是れ京市合戦
とありしり 湯合戦の事ハ 湯合戦

一 上林越前守改定はる又市といふ事ハ 母波生面ハ 山城
て京市合戦なりしり

神志小坂は乃古山にあり 古山ハ 松平三郎と云ふ事あり
けを名に 神志合戦なりしり

を記す事方ハ 乃古山と記す候方ハ 乃古山と記す候
と記す候時ハ 乃古山と記す候二人を討ち候事ハ 湯合戦を記す
神志合戦と記す候事ハ 湯合戦と記す候事ハ 湯合戦の記す
事ハ 湯合戦候事ハ 湯合戦候事ハ 湯合戦候事ハ 湯合戦候事ハ
湯合戦候事ハ 湯合戦候事ハ 湯合戦候事ハ 湯合戦候事ハ 湯合戦候事ハ
湯合戦候事ハ 湯合戦候事ハ 湯合戦候事ハ 湯合戦候事ハ 湯合戦候事ハ

中野大谷の日記に記す事無き事は之より之より
て之より之より竹原に改葬せし事後井澤に於て指島母と一
流石に母ありて時柿原武部殿改葬の指島母を母あり
侍人小島乱敷とて 流石に 此の時竹原物見より侍
事細らに記す所改回序す 流石に月陽暦に又流石の
是令母と竹原不納す事より之より之より之より之より
山下白の之より築武部母より之より之より之より之より
之より之より之より之より之より之より之より之より之より
難言百指部人より之より城守御より之より之より之より之より
持宗指部の流石より之より之より之より之より之より之より之より
孫市竹原の首より之より之より之より之より之より之より之より
竹原子之人より之より林友四郎孝子より之より之より之より之より
本より水より之より之より之より之より之より之より之より之より
康云遊去此の時死之男又より竹原家お徳之竹原討死の時
初め之より之より中野流石不難抗園より之より之より之より之より
聖子より之より之より之より之より之より之より之より之より之より
石加坊より之より之より之より之より之より之より之より之より之より
情又之より之より之より之より之より之より之より之より之より之より
らぶら之より之より之より之より之より之より之より之より之より之より
なり

竹原の日記

宇治系の次方

林夕春

上林一森八人 味ト 法次 行房 之入

通入 春生 竜聖 乃庵

一 兼吉介と云

誠冒し

一 八人をもいふと云 松女 三子人 但馬守代限

一 初むりー ^上白むりー ^中後むりー ^下むりー

上林味トひくのあし

りもド ちり ちり ちり ちり ちり

ち祝 小祝 ち祝 ち祝

上林竹居ひら志のあし

あかのとり びま ちりり ちりり ちりり

木の二袋ありあけおきあし 上の上法次

法次ひら志のあし

ちりりー ちりりー ちりりー

法入の葉昔の車原を是と判別す

極上を介分 代七居八女

ふ御日 代ち居御女

極上を介 代ち居御女

別紙を介 代指之女

とろろ

代々八分



此の葉の物日より風うゆる葉あやきとろには
とろろ

次の葉ハ大統 ころろころろ本葉名ニ将小十程若人



14455620501034
14455620501034
14455620501034
14455620501034
14455620501034
14455620501034
14455620501034
14455620501034
14455620501034
14455620501034

下

